The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Aspects of Linguistic Categorization : Lexical, Relational, and Constructional Case Studies
Author(s)	高木, 宏幸
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1721
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【13】

氏　　名	高　木　宏　幸（たかぎ ひろゆき）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　16703　号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科英文学専攻
学　位　論　文　名	Aspects of Linguistic Categorization:Lexical,Relational,and Constructional Case Studies（言語におけるカテゴリー化の諸相：語彙、関係、構文における事例研究）
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　河上　誓作 （副査） 教　授　大庭　幸男　　教　授　工藤真由美

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、①ある種の名詞句修飾の解釈の特殊性（語彙レベル）、②再帰代名詞の分布上の特徴（関係レベル）、そして、③いわゆるコントロールにかかわる問題（構文レベル）の3つの事例研究によって、認知言語学、とりわけ認知文法が想定するカテゴリー化のメカニズムが、これらの言語事実を説明する枠組みとして妥当であることを示そうとするものである。本論文は英語で書かれ、全体は6章から成り、A4判vi＋254頁である。

第1章の序論、第2章の理論的前提に続いて、第3章では、名詞句修飾の特殊な解釈について論じる。この問題は、*John have a missing tooth.*のような例が、「ジョンは（誰か他人の口から）無くなった歯を持っている」という解釈と、「ジョンは自分の歯が一本欠けている」という解釈が可能であるということである。後者の解釈（SOA解釈）は常に可能ではなく、一定の制約の存在が予測される。本論文では、SOA解釈を、知覚心理学で言う「主観的輪郭」による認知と平行に捉え、その生起に関する制約を、スキーマにもとづく認知に求め、妥当な帰結が得られることを主張する。

第4章は再帰形の分布を扱う。認知文法においては、再帰形は「関係の参与者が同一であること」を示す機能を持つとされるが、英語のself形のように局所的な再帰形だけではなく、他言語における長距離・主語指向の再帰形の特徴を捉えるためには、再帰形のスキーマを、カテゴライズする関係の種類によって相対化する必要があると主張する。具体的には、self形は客体的関係、日本語の*zibun*などの長距離再帰形は概念化にかかわる主体的な関係をカテゴライズするものであると提案する。

第5章は、コントロールに関する問題を扱う。主語コントロールと目的語コントロールを決める要因は何か、コントローラのシフトはどのような要因によって起こるのかといった問題について、構文レベルのカテゴリー化を想定することによって、妥当な帰結が得られると主張する。目的語コントロールの文は、使役構文に近いAction Chainにより特徴付けられる構文スキーマによって、従来から問題となってきた主節主語を*promise*とする主語コントロールの文は、二重目的語構文の構文スキーマによってカテゴライズされ、その意味的制約がコントロール上の特徴をもたらすことが示される。また、コントローラのシフトにかかわる特徴についても、自然な形で捉えることができると主張する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、3つの事例研究によって認知文法のカテゴリー化のメカニズムがこれらの言語事象の説明理論として妥当であることを示そうとしたすぐれた研究である。論文としてのまとまりに優れ、表現も明晰で、説得力のある議論が展開されている。

特に、これまで専ら生成文法理論が得意としてきた領域において、認知文法の枠組みがどこまで説明力を発揮できるかを具体的事例に則して示すことができた点は、高い評価に値する。この点において、本論文は恐らく本邦初の本格的な取り組みといえるであろう。

各章の評価については、中核をなす3、4、5章のうち、3章と6章はすでに日本英語学会の学会誌 *English Linguistics* に厳しい審査の上掲載されたものであり、その妥当性は充分認められるものである。そのため、公開審査では専ら4章の質疑応答が中心となった。

4章では、英語・中国語・日本語の（広義の）再帰代名詞の特徴を認知的に説明しようとしたスケールの大きい理論が展開されていて、説得力がある点で評価が一致した。しかし、いくつかの点で改善すべき点も指摘された。例えば、①英語の再帰代名詞をlocalとして分類するのは妥当か、②Type I 再帰形の取り扱いの再検討、③心理動詞や使役動詞以外の逆行照応を許す環境があることをどう説明するか、④「受益者」の定義に絡む問題点、⑤「自分」の多義的指示関係の指摘、⑥「自分」に属性・場面という広義敬語（待遇性）が絡むときの取り扱い等々についてである。しかしながら、これらの指摘はいずれも今後の更なる発展のための助言と考えるべき性質のものであり、本論文の卓越した成果と先駆性をいささかも損なうものではない。

本論文は、認知言語学の枠組みにより、カテゴリー化のメカニズムの妥当性について説得力のある理論を展開した先駆的研究であり、学界において重要な研究成果として認められることは間違いない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。